

# 近世武家社会における待遇表現体系の研究 『桑名日記』にみる桑名藩下級武士を中心として

著者	山本 志帆子
号	22
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文博第366号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/59364">http://hdl.handle.net/10097/59364</a>

# やま もと し ほ こ 山 本 志 帆 子

学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文博第 366 号
学位授与年月日	平成23年 3 月25日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	東北大学大学院文学研究科 (博士課程後期 3 年の課程) 言語科学専攻
学 位 論 文 題 目	近世武家社会における待遇表現体系の研究 —『桑名日記』にみる桑名藩下級武士を中心として—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 小 林 隆 教 授 齋 藤 倫 明 教 授 後 藤 齊 准教授 大 木 一 夫 准教授 甲 田 直 美

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 0. はじめに

江戸時代は現代日本語につながる敬語や待遇表現の歴史を考えるうえで、極めて重要な時代である。江戸時代の待遇表現については、これまでに、前期上方語を主な対象とした山崎久之 (2004)『増補補訂版 国語待遇表現体系の研究』、および、後期江戸語を対象とした小島俊夫 (1974)『後期江戸ことばの敬語体系』によって、多様な表現形式の待遇価値や敬意の段階の数が体系的に明らかにされてきた。

だが、これまでの江戸時代における待遇表現の研究は、町人階級で成立した文芸作品を主な対象として行われてきたため、位相からみて偏りがあったといわざるを得ない。とりわけ、現代日本語につながる待遇表現の歴史を考えるうえで重要であると思われる武家階級の実態については、「拙者」や「申ス」といった武家特有の語彙や語法が指摘されるにとどまっている。これは、武家によって書かれた資料が文語的なものに偏り、口語的なものが少ないことによると考えられる。しかし、江戸時代における待遇表現体系の全容を明らかにするためには、武家によって書かれた資料のなかでも口語的なものを新たに探し求め、そのうえで武家の待遇表現についても体系的に明らかにしていく必要がある。

また、武家によって書かれたものに限らず従来の文献資料を対象とした研究では、人間関係や場面、あるいは社会構造や生活実態との相関から待遇表現の運用実態を捉えるといった、社会言語学的な視点が欠けていたといわざるを得ない。これは、過去のものである文献資料を対象とする場合、人間関係や場面といった待遇表現の使い分けに関わる様々な要因を把握することが難しいことによると考えられ

る。しかし、そこにみられる待遇表現がたしかに生きていた人々のあいだで運用されていたものである以上、たとえ文献資料であっても、待遇表現の使い分けに関わる様々な要因を把握する方法を探り、そのうえで、そうした様々な要因と照らし合わせながら待遇表現の運用実態を捉えていく必要があると思われる。とりわけ、武家の待遇表現については、そもそも武家の社会構造や生活実態がよくわからないために、武家特有の語彙や語法ばかりが“武家のことば”として捉えられてきたのではないかと考えられる。

そこで、本論では、近世末期桑名藩の下級武士・渡部平太夫によって書かれた『桑名日記』を対象として、武家のありのままの生活との相関から待遇表現体系のありようを体系的に捉え、近世武家社会における待遇表現体系の一端を明らかにしたい。

本論で扱う『桑名日記』（以下、『桑名』とする）は、天保十年（1839）から嘉永元年（1848）にかけて、伊勢桑名藩の下級武士・渡部平太夫によって書かれた日記である。『桑名』は、下級武士の日常を綴った私的な日記であるため、次のような口語的な文体が広くみられる。また、およそ10年に及ぶ日記であるため、その内容から、登場人物の属性や場面の性質、あるいは具体的な生活ぶりを知ることができる。

十五日 又あめふり。鐐こしるかけまをたべ、しるゆをのみ、「さあおじいさとすまふをとろふ」云ゆへ、「鐐ハおしるかけまをたべ、しるをのんだから、つよくなつたろふから、とるまへ」と云たら、「それでもとりなへ」といふゆへ「そんならとろふ」と、ざしきでとる。（澤下春男・澤下能親 翻刻『桑名日記』第1冊147頁）

さらに、桑名藩には、藩士の禄高や役職を記した分限帳などの歴史史料が多く残されていることから、それらの歴史史料を積極的に活用することによって、待遇表現の使い分けに関わる登場人物の属性をより客観的に把握することができる。

本論では、はじめに、『桑名』と桑名藩に残る歴史史料から登場人物の属性と生活実態を明らかにする（第1部：第1章～第3章）。そのうえで、『桑名』にみられる様々な待遇表現のなかでも多彩な形式がみられる尊敬の述部待遇表現形式と人称代名詞を対象として、登場人物の属性や場面の性質と照らし合わせながら、それぞれの体系を明らかにする（第2部）。具体的には、「来ル」を意味する尊敬語（第4章）、命令形による命令表現（第5章）、授受補助動詞クレル類命令形による働きかけの表現（第6章）、人称代名詞（第8章）の体系を明らかにする。なお、尊敬の述部待遇表現形式については、それぞれの体系を突き合わせることによって、体系間の待遇価値を明確にする（第7章）。つぎに、そのようにして個別に明らかにした体系を広くみわたすことによって、近世末期桑名藩の下級武士とその家族の待遇表現体系の性格を明らかにする（第3部：第9章～第11章）。

以上のように本論では、日記の内容をよく吟味することに加え、従来の待遇表現体系の研究では顧みられることの少なかった歴史史料を積極的に活用することにより、江戸時代の桑名藩をたしかに生きていた人々の生活を浮かび上がらせ、そのうえで、生活のなかで運用されていたものとしての待遇表現体系のすがたを捉えることを試みたい。

## 1. 『桑名日記』に登場する藩士とその家族の属性

第1部の第1章では、『桑名』の概要と、文献資料としての『桑名』の価値について述べた。そして、第2章では、日記の内容と桑名藩に残る歴史史料から、『桑名』に登場する藩士とその家族の属性を整

理した。ここでは、第2章で整理した『桑名』に登場する藩士とその家族の属性について詳しく述べる。

さて、桑名藩に残る多くの歴史史料のなかでも本論では、『桑名』に登場する藩士の身分を知りうる分限帳（『嘉永元二月二十八日改御家中分限帳』、『嘉永四亥年舞臺格已下分限帳』、『萬延元庚申年分限帳』）と、『桑名』の筆者・渡部平太夫の親戚関係を知りうる親類書（『渡部平太夫親類書』、『渡部勝之助親類書』）、および『渡邊氏系圖』、そして親疎にかかわる近隣関係、すなわち居住地域を知りうる『御家中町割軒列名前覚』を用いた。ここで、そのようにして整理した属性を示すと、以下のようになる。

①親疎：家族（渡部家）、親戚（一色町の片山家、新地の片山家、新屋敷の佐藤家、矢田河原川端東の佐藤家など）、藩士仲間Ⅰ（矢田河原庚申堂北の渡部家の近隣に住み、内職などを共同で行う藩士とその家族）、藩士仲間Ⅱ（藩士仲間Ⅰ以外の藩士とその家族）、公人（殿様など）、武家階級以外

②身分：御書院格（上級武士）、舞台格以下（下級武士）

③世代：高年層、中年層、若年層、子ども

本論では、これらの属性と照らし合わせながら待遇表現の運用実態を分析していった。

また、第3章では、平太夫ら下級武士とその家族の生活実態を明らかにした。とくに『桑名』の筆者である渡部平太夫については、日記の内容から勤務実態を明らかにするなどして、一日の生活がどのような場所で行われ、また、どのような人と出会うのかを具体的に明らかにした。それにより、第2部以降で分析する待遇表現が、どのような生活のなかで運用されていたものであるのかを明確にした。

## 2. 『桑名日記』にみる近世末期桑名藩の下級武士とその家族の待遇表現

第2部では、『桑名』にみられる様々な待遇表現のなかでも多彩な形式がある尊敬の述部待遇表現形式と人称代名詞について、第1部で整理した①親疎、②身分、③世代といった登場人物の属性や場面の

図1 「来ル」を意味する尊敬語の体系

	【ア】礼儀を必要とするような改まった場面	【イ】親しい間柄の打ち解けた場面	
		近しい人	より近しい人
上位	御出ナサル	来ナサル	来ナル
同等			来ヤル
下位	ゴザラシル ゴザル		

図2 命令形による命令表現の体系

	【ア】礼儀を必要とするような改まった場面	【イ】親しい間柄の打ち解けた場面	
		近しい人	より近しい人
上位	御～ナサレ	「ナサレ」	「ナヘ」
同等			「ヤレ」
下位		「ナサヘ」	「ヤヘ」

図3 授受補助動詞クレル類命令形による働きかけの表現の体系

	【ア】礼儀を必要とするような改まった場面	【イ】親しい間柄の打ち解けた場面	
		近しい人	より近しい人
上位	御～ナサツテクダサレマシ 御～クダサリマシ	御～ナサツテオクレ ナサレ／リマシ テオクレナサリマシ	「テクンナヘ」
同等			「テクリヤヘ」
下位	テクダサレ	テオクレ	「テクリヤレ」

図4 人称代名詞の体系（自称／対称）

	【ア】礼儀を必要とするような改まった場面	【イ】親しい間柄の打ち解けた場面	
上位	〈私〉／φ	オレ／オマヘ	オラ／キサマ
同等			
下位			

性質と照らし合わせながら、その運用実態を分析した。ここで、運用実態の分析をとおして明らかにした体系を示すと、図1～図4のようになる。図1は「来ル」を意味する尊敬語の体系（第4章）を、図2は命令形による命令表現にみられる尊敬の述部待遇表現形式の体系（第5章）を、図3は授受補助動詞クレル類命令形による働きかけの表現にみられる尊敬の述部待遇表現形式の体系（第6章）を、図4は人称代名詞の体系（第8章）をそれぞれ示したものである。

図1～図4からわかるように、近世末期桑名藩の下級武士とその家族は、多彩な形式を上下・親疎といった人間関係、あるいは場面によって複雑に使い分けていたと考えられる。

また、第7章では、体系間における尊敬の述部待遇表現形式の待遇価値の異同を考察した。その結果、授受補助動詞クレル類を含むもの（図3）と含まないもの（図2）とでは、授受補助動詞クレル類を含むもの（図3）の待遇価値の方が高いことを指摘した。さらに、命令形による尊敬の述部待遇表現形式と終止形による尊敬の述部待遇表現形式とでは、命令形による尊敬の述部待遇表現形式の方が、より多くの形式を持っていることを指摘した。

こうした武家社会における使い分けの実態は、これまでほとんど明らかにされてこなかったものであるが、とりわけ、場面による精細な使い分けの実態が明らかになったことは注目される。近世末期桑名藩の下級武士とその家族の体系は、まず、【ア】礼儀を必要とするような改まった場面か、【イ】親しい間柄の打ち解けた場面かによって大きく分化している。さらに、【イ】の場面では、一定の礼節を必要とするような近い人との場面か、より近い人との場面かによって体系が分化している。なお、親しい間柄のなかでも「一定の礼節を必要とするような近い人」とは、具体的には親戚、および妻からみた夫のことである。一方、「より近い人」とは、内職を共同で行うなど生活を共にする藩士仲間Ⅰ、あるいは、夫からみた妻、親子のことである。

### 3. 『桑名日記』にみる近世末期桑名藩の下級武士とその家族の待遇表現体系の性格をめぐって

第3部では、第2部において個別に分析してきた体系を総合し、広くみわたすことによって、近世末期桑名藩の下級武士とその家族の待遇表現体系の性格を明らかにした。

#### 3.1 第三者待遇表現の運用上の特質

まず、第9章では、第三者待遇表現の運用上の特質を明らかにした。その結果、第三者待遇専用形式（レル・ラレル、ンス、テ+指定）があること、第三者によっては話し相手待遇で用いられる尊敬の述部待遇表現形式（アソバス系、御～ナサル系、御～+指定、ナサル系、ナル系）を用いて第三者を待遇することがあること、ただし、その使い分けは話し相手待遇に比べて厳格ではないことが明らかになった。また、こうした第三者待遇表現の運用上の特質に加え、身内尊敬用法や自然物に対する敬語使用という点にも着目すると、家庭内、あるいは家庭内に準じる会話場面における待遇表現の体系は、絶対敬語的な性格がみられるといえることが明らかになった。

#### 3.2 待遇表現の使い分けに関わる場面の内実 一平太夫の一日の生活に着目して一

そして、第10章では、待遇表現の使い分けに関わる重要な要因の一つである【ア】礼儀を必要とするような改まった場面、【イ】親しい間柄の打ち解けた場面が具体的にいかなる場面であるのかについて考察した。ここでは、『桑名』にみられる多彩な尊敬の述部待遇表現形式が、第3章でみた平太夫の一日の生活のなかのどのような場面で用いられているのかを分析することによって、場面の内実を明らかにした。その結果、場所に着目してみれば、【ア】礼儀を必要とするような改まった場面と、【イ】親し

い間柄の打ち解けた場面のなかでも一定の礼節を必要とするような近しい人との場面とは、家庭の外で遭遇する会話場面といえ、一方、【イ】親しい間柄の打ち解けた場面のなかでもより近しい人との場面とは、家庭内で遭遇する会話場面といえることが明らかになった。ただし、場面は必ずしも場所によってのみ決まるものではなく、たとえば、おなじ家庭内であっても聞き手や参加者、あるいは話題によって、家庭の外で遭遇するような場面にもなりうる可能性がある。

### 3.3 体系分化の方向性と社会構造との相関からみた待遇表現体系の性格

さらに、第11章では、第2部において明らかにした待遇表現体系の分化の方向性と社会構造との相関から近世末期桑名藩の下級武士とその家族の待遇表現体系の性格を考察した。その結果、近世末期桑名藩の下級武士とその家族は、図5で示すように、異なる二種の待遇表現体系（ $\alpha$ 体系と $\beta$ 体系）を併せ持っていたものと考えられる。なお、 $\alpha$ 体系は先にみた【ア】礼儀を必要とするような改まった場面と【イ】親しい間柄の打ち解けた場面のなかでも一定の礼節を必要とするような近しい人との場面で用いられる体系である。一方、 $\beta$ 体系は【イ】の場面のなかでも近しい人との場面で用いられる体系である。

図5 『桑名日記』にみる近世末期桑名藩の下級武士とその家族の待遇表現体系

	$\alpha$ 体系	$\beta$ 体系
体系分化の方向性	分析的な分化	非分析的な分化
形式と人間関係の対応	一つの形式で幅広い人間関係を言い表す	形式と人間関係の上下が即応している
社会構造	流動的な大きな言語共同体	固定的な小さな言語共同体

このうち $\alpha$ 体系は、不特定多数の人と出会う流動的な大きな言語共同体で用いられる体系であり、御～ナサレや御～クダサレといった待遇価値が比較的高い一つの形式によって幅広い人間関係を言い表している。 $\alpha$ 体系は「ナサレ」「クダサレ」という基本形式に「御」や「マシ」を付加することによって異なる待遇価値を持った形式を生み出しており、分化の方向性は分析的といえる。

一方、 $\beta$ 体系は相手がよく見知っている人どうしの固定的な小さな言語共同体で用いられる体系であり、複数の形式によって人間関係の上下を言い表している。 $\beta$ 体系は上位の者に対して用いられる「ナヘ」「テクンナヘ」、同等の者に対して用いられる「ヤヘ」「テクリヤヘ」、下位の者に対して用いられる「ヤレ」「テクリヤレ」というように、語形そのものを変化させることによって異なる待遇価値を持った形式を生み出しており、分化の方向性は非分析的であるといえる。

このように近世末期桑名藩の下級武士とその家族は異なる二種の待遇表現体系を併せ持っているが、こうした二種の待遇表現体系が併存するという状況は、現代日本語の諸方言にもみられることが先行研究によって明らかにされている。また、歴史的にみれば、 $\alpha$ 体系と $\beta$ 体系の性格はそれぞれ、相対敬語的な性格を持つとされる現代敬語と絶対敬語的な性格を持つとされる古代敬語に対応するものであるといえる。

### 4. 近世末期桑名藩の下級武士とその家族の武家ことばとしての待遇表現体系

以上のように本論の分析から、近世末期桑名藩の下級武士とその家族は、異なる二種の待遇表現体系を併せ持っていたと考えられることが明らかになった。

ところで、桑名藩は特有の家中弁があったことで知られる藩である。これは、桑名藩が江戸時代を通

じて転封を繰り返すなかで、独自の集団語を形成していったものとされている。戦後の調査ではあるが、『三重県方言』第2号の「桑名武家ことば特集」(1956年発行)に、こうした家中弁が多く報告されている。そこで、本論で明らかにした待遇表現体系と『三重県方言』で“武家ことば”として報告されている待遇表現を比較してみたところ、「イキナツタ」「ハヤクシヤレイ」のような本論でいうところの $\beta$ 体系に属するナル系とヤル系の尊敬の述部待遇表現形式が“武家ことば”として捉えられていたことがわかった。

以上をふまえ終章では、桑名藩において $\beta$ 体系に属する尊敬の述部待遇表現形式が“武家ことば”として捉えられていた背景を考察することによって、近世武家社会における待遇表現体系がいかなるものであったのかということを明らかにし、まとめにかえた。

すなわち、近世末期桑名藩の下級武士とその家族の生活は、身分による上下関係がなく、かつ、生活水準や家庭環境を同じくする人々のあいだで営まれるものであった。たとえば、『桑名』の筆者である渡部平太夫は近隣に住む藩士仲間Ⅰと内職を共同で行うなどして生活していたが、こうした人々は、みな平太夫とおなじ舞台格以下の下級武士であった。彼らのあいだには、親戚とのあいだに存在するような親疎関係や身分関係はみられない。一方、一色町の片山家や新屋敷の佐藤家の人々は平太夫の親戚ではあるが、これらの人々は御書院格の家の人であり、身分からみて上位の人であった。したがって親戚とのあいだでは、親しい間柄とはいえ礼儀が必要とされる。親戚とのあいだでは、社会的な規範や礼儀をわきまえる必要がある場面で用いられる $\alpha$ 体系が用いられるのもそのためである。だが、近隣に住む藩士仲間Ⅰは生活水準や家庭環境を同じくする人々であるから、そうした礼儀は必ずしも重要とはされない。むしろ、そのような生活水準や家庭環境を同じくする人々とのあいだでは、仲間意識を高めることが第一に求められる。

以上のことから、彼らは $\beta$ 体系を集団で共有することによって、仲間意識や連帯意識を高めていたのではないかと考えられる。 $\beta$ 体系とは、「ナヘ」は上位の者に対して、「ヤヘ」は同等の者に対して、「ヤレ」は下位の者に対してというように、集団内の上下関係、すなわち年齢からみて目上か目下か、それとも同等かという属性によって複雑に使い分けられる体系であり、絶対敬語的な性格を持つ体系である。そのような複雑な体系は、よく見知っている間柄でなければ使えない体系といえ、また逆に、仲間以外の人を使うことは難しい体系であるといえる。

このように仲間意識を高めるために $\beta$ 体系が用いられていたと考えられるが、その一方で、近世末期の下級武士が置かれた抜き差しならぬ状況も、 $\beta$ 体系を維持する要因となっていたのではないかと考えられる。すなわち、平太夫ら下級武士は武士とはいえ、その生活は町のものとはほとんど変わらないものであった。そのような状況にあって、下級武士たちが武家であることを指標するものは、他ならぬことばであったと考えられる。 $\beta$ 体系は絶対敬語的な性格を持つものであり、集団内の人間関係に応じて使い分けなければならないものであった。そのような複雑な体系を用いることができるのは武家であるからこそともいえ、結果として、桑名城下に住む武家階級以外の人に対して、武家であることを指標するものになっていたのではないかと考えられる。

さて、 $\beta$ 体系が武家ことばとして捉えられていたとなると、従来の研究において武家のことばとされていた「拙者」や「申ス」といった語彙や語法の位置づけが問題となる。そこで、そうした語彙や語法のなかでも第8章で分析した人称代名詞に着目してみると、「拙者」や「其方」といった人称代名詞は、いずれも候文中で用いられていることがわかった。また、こうした人称代名詞は武士の威信に関わる場面や、極めて身分の高い人々の間で用いられていることがわかった。つまり、本論では扱わなかったものの、 $\alpha$ 体系と $\beta$ 体系とは別に極めて公的な場面で用いられる未知の $x$ 体系があったのではないかと

推測される。

以上をまとめ、桑名城下において運用されていた待遇表現体系を概念的に示すと図6のようになる。外枠は桑名城下全域、すなわち大きな言語共同体を示す。そして、楕円で囲った部分は、内職を共同で行うなど生活を共にする藩士どうしの小さな言語共同体を示す。また、四角で囲った部分は桑名城内であることを示す。

図6 桑名城下において運用されていた待遇表現体系（概念図）

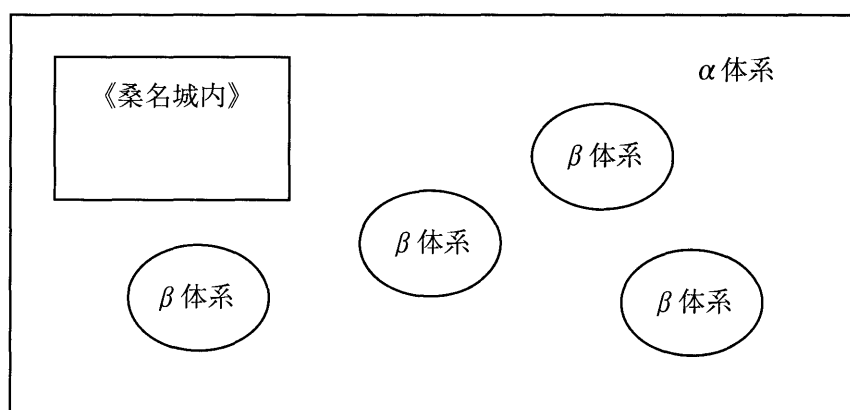


図6で示したように、近世末期桑名藩の下級武士とその家族は、 $\alpha$ 体系がおもに用いられる桑名城内、 $\alpha$ 体系がおもに用いられる桑名城下全域、 $\beta$ 体系がおもに用いられる家庭内という、3つの生活空間を行き来しながら生活していたのではないかと考えられる。桑名藩では、居住地域が厳密に定められていたことが『桑名御城下之圖』（東北大学附属図書館狩野文庫蔵）からうかがえることを併せ考えると、こうした生活空間の違いは、桑名城下に住むものにとって強く意識されるものであったと考えられる。

## 5. 本論の意義

本論の意義としては、まず、先に示した図1～図4のような近世武家社会における待遇表現体系を詳細に示すことができたことがあげられよう。今後は、本論によって明らかになった近世武家社会における待遇表現体系を、従来の研究によって明らかにされている町人の待遇表現体系と比較することが望まれる。

そして、本論により、文献資料を対象とした研究でも、従来の研究では顧みられることの少なかった歴史史料を積極的に活用することによって、社会言語学的な視点を取り入れた研究が可能であることを示すことができたといえる。

さらに、本論をとおしてみてもきたような人間関係や場面に応じた使い分けの意識は、現代を生きる我々につながるものである。また、一つの社会に二種の異なる体系が併存するという状況は、現代日本語の諸方言にみられるものであるだけでなく、世界の諸言語にもみられるものであることが知られている。したがって、本論は、近世末期桑名藩の下級武士とその家族の待遇表現体系を明らかにしたものにすぎないとはいえ、言語一般の問題を考えるうえでも重要な視座を与えるものといえる。



# 論文審査結果の要旨

本論文は、江戸時代末期の下級武士の手による日記『桑名日記』を対象として、武家ことばにおける待遇表現体系を明らかにしようとしたものである。全体は3部11章からなり、それに序論としての序章、まとめとしての終章が付く。

まず、序章において、これまでの江戸時代の武士ことば研究の現状の問題点を明らかにし、それをふまえて本論の目的を述べる。

続く第1部「『桑名日記』と近世末期桑名藩の下級武士とその家族」においては、近世下級武士の待遇表現体系を明らかにする前提として、『桑名日記』の性格、桑名藩下級武士の生活の姿、人間関係について検討を加える。まず、桑名藩下級武士の手による『桑名日記』と待遇表現を知ることに関する歴史史料について検討を加え（第1章）、日記に登場する藩士と家族の関係を詳細に検討する（第2章）。その上で、桑名藩下級武士と家族の生活を描き出す（第3章）。

以上の検討をふまえ、第2部「『桑名日記』にみる近世末期桑名藩の下級武士とその家族の待遇表現」においては、尊敬の述部待遇表現および人称代名詞を対象として待遇表現体系を明らかにする。「来る」を意味する尊敬語（第4章）、命令形による命令表現（第5章）、授受動詞命令形による働きかけ表現（第6章）、人称代名詞（第8章）の検討をもとに、礼儀を必要とするあらたまった場面と、親しい間柄の打ち解けた場面において、異なる待遇表現体系があることを明らかにした。

第3部「近世末期桑名藩の下級武士とその家族の待遇表現体系の性格をめぐって」においては、第2部で明らかにした結果のもつ意味を検討している。第2部で見た対者待遇に対する第3者待遇の性格（第9章）、礼儀を必要とするあらたまった場面と親しい間柄の打ち解けた場面の内実（第10章）の検討をおこなった上で、『桑名日記』にみられた待遇表現体系の分化のあり方のもつ意味を社会構造との関わりから検討した（第11章）。

終章においては、以上をまとめつつ、桑名藩下級武士の待遇表現体系のもつ性格に言及する。

従来の研究は、江戸戯作などの文学作品を通して武家のことばをみたものが中心で、江戸時代の武家のことばが体系的に明らかにされてきたとは言えない。本論文は、『桑名日記』に描かれる下級武士の生活を丁寧に把握した上で、桑名藩における下級武士の待遇表現について精細かつ体系的に考察を加え、あらたまった場面と打ち解けた場面とで異なる待遇体系があることを明らかにした。この成果は、日本語史研究、日本語の待遇表現研究に大きく寄与するものといえ、高く評価できる。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。